

八戸の一日

柴田元幸 翻訳家

八戸には朗読劇『銀河鉄道の夜』公演のために行った。2017年12月17日のことである。公演は南部会館というところでやった。この朗読劇は古川日出男さんがほぼ毎回新しい台本を書くのだが、この八戸の回には、僕が「私、さそりに見えますか」とお客さんに向かって訊く場面があった。劇が始まって間もないところであり、答えが返ってきたりもしないだろうと高をくくっていたら、客席から「見えるよ」と年配の女性の温かい声が返ってきてドギマギしてしまい、何ら当意即妙の反応ができず悔しい思いをした。翌月の南相馬での公演にもこの科白はあったので、「見えるよ」と言われたときのために今度は気の利いた返答を用意していったら、「私、さそりに見えますか」と訊いたとたんに「見えない」……八戸のお客さんは優しい。

八戸公演は夜だったので、昼は公演を主催してくれた八戸ブックセンターを訪問した。まず並んでいる本の質がすごく高いし、並べ方にも工夫があり、お酒落に実質が伴っている。カフェがあるのはまあ近年珍しいが、ここはお客さんが本を読んだり書き物をしたりするスペースまであって、とてもいい書店だと思った。ひとつ覚えているのは、「イギリス」のコーナーに宮田珠己の『ストコランド日記』があったこと。ユーモアなのか勘違いなのか訊こうかと思ったが、訊くのも野暮だと思って訊かなかった。

昼食はブックセンターの人に教わって近所の蕎麦屋に行った。名前を覚えていなくて申し訳ないが大変美味しかったことはよく覚えている。

公演のあとの打ち上げも楽しかった。何を喋ったかはまったく覚えていないが、地元の人半分、朗読劇関係者半分为、横に二つ並んだテーブルでいい感じに交じりあって楽しく話した感触ははっきり残っている。

いま当時の告知を見たら、朗読劇『銀河鉄道の夜』は八戸ブックセンターの開設一周年記念イベントだったのだった。センターのもりはなこさんが出演者四人の素敵なイラストを描いてくれている。

その後、八戸ブックセンターを再訪するお誘いもいただいたのだけれど、あいにくスケジュールが埋まってしまっていたり、その後はコロナだったりで、まだ実現していない。

コロナがなくても、売上げではなく中身を第一に考える書店を運営していくのはものすごく大変だろうし、そこへコロナが追い打ちをかけて、本当に大変だったと思う。これからも大変だろうが、この

書店に救われる人はきつといる。数字では見えない大切さがあることを、背後で支えている八戸市も十分理解してくださっているから続いているのだろうが、今後もその理解を保っていただければと思う。

また往き来が自由になったら、八戸ブックセンター、行きたいです。

柴田元幸 motoyuki shibata

翻訳家

開設1周年記念イベント 朗読劇「銀河鉄道の夜」
(2017)

1954年生まれ。文芸誌「MONKEY」編集長。訳書にポール・オースター、スティーヴン・ミルハウザー、レベッカ・ブラウン、トマス・ピンチョン、エドワード・ゴーリー、スチュアート・ダイベック、スティーヴ・エリクソンなど多数の現代アメリカ作家を翻訳。

